

図表2-4-6 ▶開幕イベント「1万人の第九 EXPO2025」



出所：NTT「大阪・関西万博開幕、『1万人の第九 EXPO2025』開催のご報告」（2025年4月14日）

データを連携させる都市OS（大阪広域データ連携基盤：ORDEN）を2025年4月に本格運用開始し、大阪・関西万博で蓄積されるさまざまなデータを一元管理・分析できるようにした。この都市OSは大阪・関西万博後もソフトウェアとして活用され、関西圏のスマートシティ実現や行政サービス向上に継続的に活かされる計画である。

NTTデータやNTTコミュニケーションズ（現NTTドコモビジネス）などグループ各社もこのデータ基盤構築に参画し、大阪・関西万博を起点とした新たな都市サービス創出に取り組んでいる。実際、NTTグループは大阪・関西万博の会期中に来場者向け実証として、スマートフォンで混雑状況が把握できるアプリ「EXPO2025 Personal Agent」（NTTアーバンソリューションズが開発）や、多言語音声翻訳サービスなども提供しており、これらも都市OS上のデータ連携によって支えられている。さらに、Perfume 遠隔ライブや超歌舞伎で示した空間伝送技術は、大阪・関西万博後の多様なビジネス領域で応用が期待されている。NTT研究所の触覚振動音場提示技術をもとにしたこのリアルタイム空間伝送は、医療やスポーツ観戦などで、離れた場所から臨場感や触覚的体験を伝える用途に発展し得る。また、NTTアノードエナジーはNTTパビリオン内に設置されたペロブスカイトの太陽光発電電力（ゼロカーボン電力由来）を活用し、隣接した水素プラントで生成した水素を、地中のパイプラインを通じてパナソニックグループパビリオンへ供給し、電力に変換することで、次世代エネルギーと期待される水素の普及に向けた、水素サプライチェーンモデル

の実装を行った。大阪・関西万博での挑戦は、そのビジョンを具体的な形で示し、社会実装への一歩を踏み出す場となった。

大阪・関西万博では、会場にこれから来る人、既に来た人、そして来られない人にも楽しんでもらうために、全世界に向けて「バーチャル万博」アプリが公開された（図表2-4-7）。NTTグループは同バーチャル会場のプラチナパートナーとして参画し、アプリケーションの全体設計及び各パビリオンの外観表現を担当した。基本コンセプトを「空飛ぶ夢洲」と定め、万博会場・夢洲をオンライン空間上に12の群島として三次元CGで表現した。参加者は自律的に操作するアバターを用いて群島を巡り、世界一周の冒険を想起させる回遊体験を得る構成とした。国・地域・言語を超えた交流を促進するため、クルーの衣装や所持するグッズは出展者が提供するアイテムを自由に組み合わせてカスタマイズできる仕組みを設けた。加えて、翻訳機能、多様なスタンプ及びエモートを備え、バーチャル会場内で相互に遭遇した参加者同士が気軽に意思疎通できる環境を用意した。

NTTグループの大阪・関西万博への参画意義は、新技術のショーケースにとどまらず大阪・関西万博後の未来社会への布石を打つ点にある。半世紀前の1970年大阪万博で当時の電電公社が「夢の技術」であったワイヤレス電話を出展し、通信の新時代を予感させたように、2025年の大阪・関西万博でもNTTは「離れていても同じ場を共有できる」という通信の新たな地平を示したといえる。